

I 地域概況 General overview of Uchiko-Cho

1. 自然環境 Natural environment

1-1. 位置 Location

内子町は四国愛媛県の県都松山市から南西方向に40km圏内の四国山地瀬戸内海側の西端山麓部に位置している。町の行政区域は南北14.5km、東西15.5kmのほぼ長方形を呈し、東は広田村、小田町に、西は大洲市に、南は河辺村、五十崎町に、そして北は中山町、双海町と町境を接し、総面積は121.17km²である。また町の総人口は平成2年3月現在、12,803人を数える (Fig. 1)。

1-2. 地質・地形・土壌 Geology, topography and soil conditions

内子町の地質の大部分は、四国を北四国の内帯と南四国の外帯に分けている中央構造線の南側に位置し、その外帯北部にある三波川帯の大部分を構成する石炭紀から二畳紀にかけて変成を受けた結晶片岩類を基盤としている。また町内の一部には火山岩類の露頭もみられる。

内子町の地形は四国山地の西端に位置する丘陵状の低級な山地地形で構成されている。町を取り囲むように町境を形成している峰には、町内最高峰の牛ノ峯(895.5m)をはじめ、草屋敷(824.0

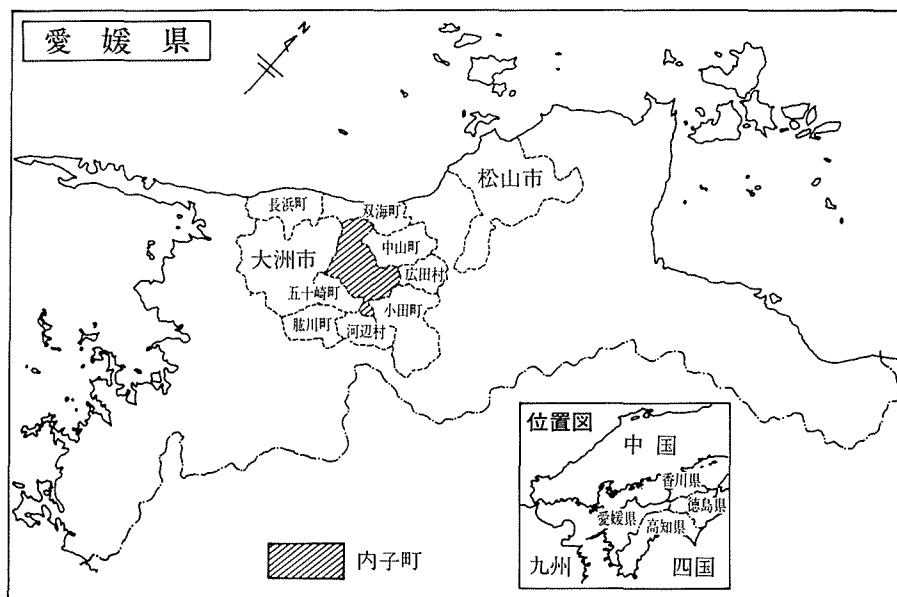


Fig. 1. 内子町及び周辺市町村位置図。

Location of Uchiko-Cho and its vicinities in Ehime Prefecture.

m), 棟山 (810.0m), 鎧掛山 (788.8m), など800~900m級の山もみられるが, 町内の大部分は標高700m以下の低い山で占められている。その山間には, 町の南部を東西に流れる小田川や, 町の中央や西部をほぼ南北に流れる中山川や麓川などの主要河川が町を区切るように流れている。

内子町に分布する土壌をみると, 山地地形を反映して, 本地域の大部分は乾性褐色森林土で覆われている。町の南西部の小田川と中山川が合流する付近では, 僅かながら褐色低地土や灰色低地土などの沖積土がみられる。

1-3. 気 候 Climate

愛媛県の瀬戸内海沿岸低地の温暖で比較的雨が少ない瀬戸内式気候とは多少異なり, 四国山地山地西部地域に位置する内子町の気候は, 山間部にみられる, 冬季の気温が低く, 降水量も比較的多い気候的特性を示す。ちなみに瀬戸内式気候下の松山の年平均気温(1951~1980年の平均値)は15.6℃, 年間降水量(1951~1980年の平均値)は1,336.7mmであるのに対し, 内子町東部の山間部に位置する大瀬地区では年平均気温(1987~1989年の平均値)が13.9℃と瀬戸内海沿岸部に比較して低く, 年間降水量(1987~1989年の平均値)は1,862.3mmと沿岸部に比較して多いなど山地気候の特性を示している。

1-4. 土 地 利 用 Land use

四国山地の西部地域に位置する内子町では, 町の南西部の小田川と中山川の合流する付近では小面積ながら河岸段丘や沖積低地も発達しているが, 町の大部分は山地となっている。このため市街地やまとまった面積の水田は町の南西部に限られ, 総面積121.17km²の内子町の67%は, クヌギ・コナラ二次林, クヌギ植林, スギ, ヒノキ植林, アカマツ二次林などの代償植生からなる山林で占められている。かつてはアカマツの植林も山地に広くみられたが, 近年の病虫害による被害を受け減少している。またクヌギは木炭生産用に使われていたが, 現在では椎茸のほだ木として利用するために毎年1回の下草刈りや, 10~15年毎に伐採するといった管理が行われている。

一般的に山地は地形的に小田川, 中山川, 麓川により浸食された谷部はきわめて急傾斜であるが, 上部でやや緩やかになっている。山間部の集落は, この高地の南向きの緩斜面にみられることが多い。かつては暖かい緩斜面を利用して, 段々畑状に水田耕作も行われていたが, 現在では, ブドウ, カキ, クリなどの果樹園や, 葉タバコなどの栽培畑, 野菜畑として利用されている。

山麓など低山地の山村集落の周辺では, 川沿いの狭い沖積低地を利用して水田耕作をおこない, 斜面部は, カキやクリの果樹園として活用している。また集落の裏山には, モウソウチクやマダケなどの竹林も広くみられるが, コジイ萌芽林やシラカシ林, アラカシ林などの常緑広葉樹林も小面積ながら残されている。これら裏山の山林は, かつては薪炭材や農具用材として定期的な管理が行われていたが, 現在では利用されずに放置されているところが多い (Fig. 2, 3)。



Fig. 2. 内子町の市街地の外観。古い町並みが保存されている(内子地区, 海拔50m付近)。

Appearance of Uchiko-Cho, where the old streets and houses are well preserved (Uchiko).



Fig. 3. 山間部の外観。緩斜面は耕作地に, その他の山地斜面はスギ・ヒノキ植林, クヌギ植林, モウソウチク林などの代償植生に置き換えられている(石畳麓地区, 海拔400m付近)。

General view of mountainsides in Uchiko-Cho. Fields are located on gentle slopes and steeper slopes are occupied by substitute vegetation such as *Cryptomeria japonica* and *Quercus acutissima* forest plantations and *Phyllostachys pubescens* bamboo groves (Ishidatami, Roku).

内子町東部の大瀬地区の熊ノ滝付近では、かつて銅の採掘が行われていたが、現在採掘跡地には鉱毒の沈澱池を残すのみで、当時の面影はほとんどみられない。

2. 植生概況 Vegetation

内子町は海拔50m内外の最低地点から標高900m近くの最高地点までの範囲にあるが、四国北西部の温暖な気候環境を反映して、町の大部分は沿岸低地部から標高900～1,100mの範囲に広がるヤブツバキクラスの常緑広葉樹林が発達する地域に属している。しかし町域が内陸の山間部にあることから、小面積ではあるが海拔800m前後の山地の北西斜面部や海拔600m以上の日陰で湿潤な溪谷地には、夏緑広葉樹の優占するヤブツバキクラス上部の植生やブナクラスの植生も局地的に生育している。

2-1. ヤブツバキクラス域の植生 Vegetation of the *Camellietea japonicae* region

内子町の南西部の海拔50～350mの範囲にあり、瀬戸内海に流れる肱川の支流である小田川に沿って発達する沖積低地と、それに続く丘陵地や低山地は、気候環境的にコジイやスダジイなどの常緑広葉樹林の発達するヤブツバキクラス域に属するものと考えられる。すなわち本地域に分布する主要な自然植生は森林植生であり、その大部分はカナメモチーコジイ群集などのコジイ林で占められ、一部にホソバカナワラビースダジイ群集などのスダジイ林やルリミノキーイチイガシ群集の断片的な林分が生育する、いわゆる照葉樹林の発達した植生景観が考えられる。しかし町内には、より暖地な沿岸低地、丘陵地に分布するムサシアブミータブノキ群集、イノデータブノキ群集などのタブノキ林や、ミミズバイースダジイ群集などのスダジイ林の生育は認められなかった。これは、内子町が海から離れた、冬季に寒冷となる山地気候の影響を受けやすい内陸山間部に位置していることによる (Fig. 4)。

海拔50～350mの範囲の低山地帯は、気候環境的にも温暖で、地形的にも恵まれていたことから、早くから人の定着、開墾が行われた。その結果、自然植生のコジイ林の大部分は破壊され、僅かに社寺林として残されているにすぎない。現在、低山地帯にみられる植生の大部分は、人間による火入れ、伐採などの破壊や干渉により生じた、コジイ萌芽林、クヌギーコナラ群集などの二次林や、スギ、ヒノキ植林、モウソウチク、マダケ林、果樹園、水田や畑地などの耕作地そしてネザサーススキ群集などの二次草原等の代償植生に置き換えられている。

内子町の大部分を占める海拔100～600mの範囲にある山地帯の中部から上部にかけての地域は、自然植生としてシラカシ群集などのシラカシ林、ナナメノキーアラカシ群集などのアラカシ林そしてウラジロガシ群落などのウラジロガシ林等の常緑カシ林の優占した森林植生が発達する。

低山地帯と同様に、山地帯中～上部においても、人間の開発による破壊が広く及んでおり、常緑カシ林を主体とした自然植生は、社寺林として僅かに残存するのみで、その大部分はスギ、ヒ



Fig. 4. 常久寺地区の丘陵斜面部に発達するカナメモチーコジイ群集の外観
(海拔120m付近)。

Physiognomy of the *Photinia - Castanopsis* developed on hillside (Jokyuji).

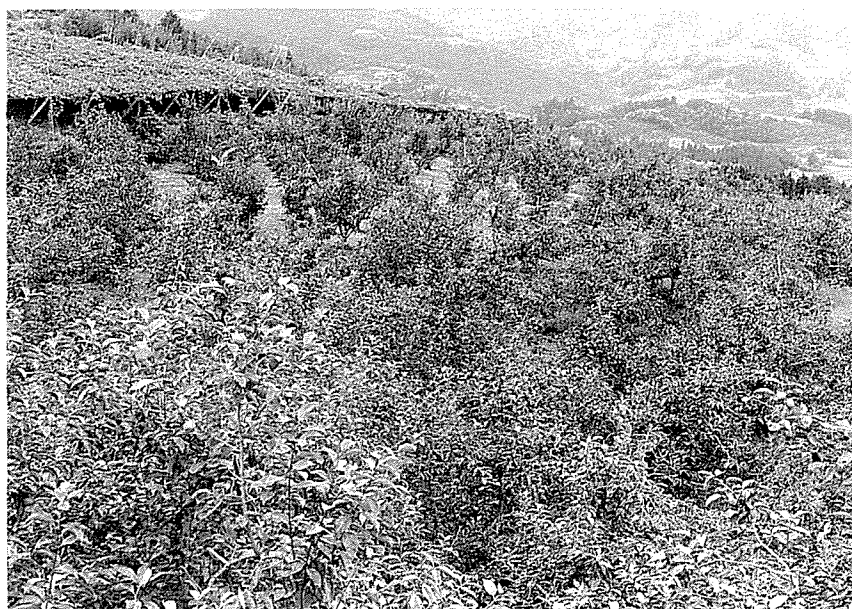


Fig. 5. 内子町では山腹緩斜面を開発した、カキ、ブドウなどの果樹栽培が盛ん
に行われている (大瀬佛谷地区, 海拔350m付近)。

Orchards of persimmons and grapes spread on mountainsides in Uchiko-Cho (Ohse, Hotokedani).

ノキ植林、クヌギ植林、クヌギーコナラ群集、コバノミツバツツジアカマツ群集などのアカマツ二次林、竹林、果樹園、畑地、二次草原などの代償植生に置き換えられている (Fig. 5)。

内子町の町界を形成している海拔600～900mの範囲にある山稜は、気候環境的に、本来モミヤツガなどの常緑針葉樹やアカガシなどの常緑カシの混生するコガクウツギーモミ群集など自然性の森林植生の発達するヤブツバキクラス上部域に相当する。しかし本地域の自然植生のほとんどがすでに破壊され消滅しており、そこはスギ、ヒノキ植林やブナクラス域の代償植生であるクリーコナラ群集などの落葉二次林に置き換えられている。

2-2. ブナクラス域の植生 Vegetation of the Fagetea crenatae region

四国ではブナクラス域は海拔900～1,100m以上に発達すると考えられているが、内子町は海拔900m以下にあり、本来気候環境的にはブナクラスの植生は分布しない。しかし内子町にも小面積ではあるがブナクラスの自然植生も認められる。町内の海拔500m以上の谷部溪谷地に局地的に生育するミヤマクマワラビーケヤキ群集などのケヤキ林や黒山（標高729.6m）の稜線に発達する岩峰などに点的に分布するイブキシモツケーアカマツ群落やタカネマンネングサーイワヒバ群落などがブナクラスの自然植生としてあげられる。また内子町にはブナクラス域の代償植生として、山地二次林のクリーコナラ群集が海拔500m以上の山地尾根斜面に局地的ながらみられる。